

峨山禅師の弟子たち

著者	山口 正章
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	21
ページ	41-48
発行年	2016-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000338



峨山禪師の弟子たち

大本山總持寺副監院心得 山口 正章

こんにちは。ただ今ご紹介いただきました總持寺の山口でございます。

今回このようなシンポジウムを開催することが出来まして、大変嬉しく思っております。お一人でも多くの方に峨山禪師の名前とその業績を知っていただくことが、私たち大本山總持寺の大きな願いであります。

どの宗教・宗派も開祖さまの名前は、皆さんよくご存じですが二代さまとなるとほとんど知らないのです。これは有る意味、当然のこととも云えますが、実はここに今回の大遠忌のテーマ「相承」の意義が存するのです。開祖さまのみならず、二代さまをとっても大切にするのは、曹洞宗の特徴と云って宜しいかと存じます。

今回のシンポジウムのポスターやチラシでは「峨山禪師の弟子たち」の下に「通幻寂靈を中心として」という副題がついておりましたが、今日はこれを省きました。

なぜならば、峨山禪師の弟子の中で、確かに通幻禪師の門派が最も発展しましたが、金子みすずの詩じやありませんが「みんな違って、みんな良い」なのです。

お弟子たち二十五人それぞれ素晴らしかった訳です。ただ結果としてそれぞれの法孫が後世まで発展したかどうかと云うことで、一人ひとり優れておりました。

さて、私にとりまして今回の大遠忌は、峨山禪師のみならず兄弟弟子の明峰素哲禪師にも光を当てたいと思っております。

瑩山禪師には五十名ほど僧俗の弟子がいたと伝えられていますけれども、その中の筆頭は峨山禪師と明峰禪師のお

二方でありました。明峰禅師にはお弟子が三十名以上いて、後世「十二門派」と称されました。

峨山禅師はご承知のようにお弟子が二十五哲と云われ二十五人おりました。両者のお弟子たちを觀ますと、明峰禅師の場合は殆どが瑩山禅師の遺弟を引き継いだ方であり、未嗣法ならば自分の法を嗣がせました。

峨山禅師の場合はそうではなくて、ご自身が全国を歩き廻り修行遍參をした際に知遇を得たであろう方たちが膝下に集まって来ています。新しく自分で開拓してお弟子さまが来ているのです。たぶん、峨山禅師には独自の広いネットワークがあつたのではないかと考えております。

このように、明峰禅師と峨山禅師のお弟子たちには、明らかな違いがあるのです。

同時にこのことは、明峰禅師と峨山禅師の人柄を窺えることになります。

明峰禅師は穩やかで落ち着いていて物事をじっくり考えるタイプの方でありました。瑩山禅師は、明峰禅師のことを、「年老いた馬が山道を行くようなものでいわゆる老馬に乗っていて山の中で迷ったら、馬から降りて手綱を放して馬を歩かせたところ、迷わずに麓に戻ることが出来た」という故事を引用しております。

峨山禅師については、瑩山禅師は「麟麟が雨の中をバァッと天空に昇っていくような勢いの盛んな様子である」と述べられております。

このように瑩山禅師は両者を対照的に表現していらつしゃいますが、当然そこに集まるお弟子たちは、それぞれの家風・人柄に魅了された人たちであつたのでしょう。

先ほど尾崎先生が述べられました、峨山禅師のお弟子たちは実際には二十八哲とも二十九哲とも三十哲とも云われます。しかしなぜ二十五哲なのでしょう。それは江戸時代の頃、永澤寺関係資料に二十五哲という文言が記されていたからと云われます。二十五は数字として切りが良いですね。「二十五哲の五哲」と云つた方が「二十八哲の五哲」よりもスッキリとしております。

このようなことから、徐々に二十五哲の名称が広まっていったのでしようが、実際にはもっと多くのお弟子がいらっしゃったということです。

次に、峨山禪師の弟子たちの活躍についてです。私は四つに大きく分類してみました。

五哲に関しては最後に述べるとして、最初に「無底派」です。これは一番弟子の無底良韶禪師で岩手の正法寺を開いた方です。残念ながら四十歳代で早くに亡くなってしまいましたから、直接的には總持寺へあまり関与しませんでした。その流れが東北地方に勢力を伸ばしていきました。この無底禪師を中心として、月泉良印禪師・道叟道愛禪師などが、東北地方に峨山禪師の教えを展開していった。ですから別名「正法寺派」ともいえるかと思います。

二番目に、九州地方に展開した勢力で、「無外・無着派」です。無外円照禪師と無着妙融禪師のことです。九州一円に、この方たちとその法孫が峨山禪師の教えを広めていきました。

三番目が「源翁派」です。源翁派というのは源翁・心昭禪師の流れをくむ方たちです。現在、石を割る道具を玄能と云いますが、その言葉の元になったのがこの源翁禪師です。この方は、總持寺から遠く離れて、東北の福島から中国の岡山まで行脚して禅の教えを広めていきました。

その為に、後世事実かどうか不明ですが、通幻派から一時批判されたということ。しかし現在も隆々として源翁派は法孫が榮えており、八カ寺のお寺が聞かれて三十六門にも含まれております。

そして最後に「五院五哲派」。普蔵院を開いた（開基）太源宗真禪師、妙高庵を開いた通幻寂靈禪師、洞川庵を開いた無端祖環禪師、伝法庵を開いた大徹宗令禪師、如意庵を開いた実峰良秀禪師の五哲です。主に總持寺や能登近辺に留まった方がたです。

先述しましたが、二十五哲の中で五哲だけが優れていたのではなく、他の二十哲もそれぞれ素晴らしく、それぞれの立場で本山の護持発展に尽くしたのです。その形態は、能登に留まって總持寺の近くで總持寺の基礎を作ること

力を尽くす人もいれば、教線拡張の為に自分の故郷、あるいはさまざまな外護者のご縁で遠く離れた地に赴いた人などです。

これが二十五哲の行状でありまして、従来の「二十五哲の中の特に優れた五哲が山内境内に塔頭を建てて五院とした」などの記述は的を射ていないと存じます。

その五院ですが、普蔵院・妙高庵・洞川庵・伝法庵・如意庵、これらは塔頭でありますから御開山、あるいは御開尊、瑩山禅師と峨山禅師のお墓を守る為の庵であります。ですから山号はありません。また開山ではなくて、「開基」と言います。「普蔵開基・太源宗真大和尚」「妙高開基・通幻寂霊大和尚」という呼称をしております。天明五年の本末帳を眺めますと、太源派三〇一〇カ寺、通幻派六八〇〇カ寺ですけれども通幻派は関三利末（これも通幻派）を入れますと、大方八八〇〇カ寺になります。そういう意味では全国展開に於いては「数は力なり」であったのかも知れません。

また、輪番住職制度がこの五院を中心に始まり、總持寺教団が大発展する一つの要因になりましたが、このことは宮地先生の発表に譲りたいと思います。

さて、永平寺承陽殿の前庭に「峨山石」が建てられていて、そこに刻まれた銘文の内容は、現在の永平寺と總持寺の調和している状態を予見した如きの驚くべきものです。

今回の大遠忌に於いて、總持寺は峨山石を大きく取りあげました。それまでは戦国〜江戸期に於いて、却って永平寺の方が峨山石を取りあげてきたと云われます。

それは、曹洞宗寺院が全国一万七、八千カ寺あっても、ほとんどが總持寺系の末寺でありましたから、伽藍再興の際に協力を仰ぐきっかけとしたのでしよう。

永平寺は度々兵火に遭い伽藍を失いましたが、再建する際は總持寺系のお寺からも勸化（寄付）をお願いする必要

があつたのです。

その時に、その根拠として示したものが峨山石の銘文であつたかと思ひます。

またそれに応じて峨山派も復興に対し積極的に協力してきた経緯があるのです。

それから、二十五哲の頃から『語録』が沢山作られるようになりました。それを読みますと、積極的にお葬式や法事を行っています。道路や橋を設けるときの祈祷や供養も行い、人びとの安寧を祈っています。

そういう檀家さんに対しての、積極的な布教活動と言ふのが盛んになつていったと思ひます。

次に『瑩山清規』について申しあげます。本来は「洞谷清規」と称すべきですが、従来『瑩山清規』と言ひ慣わしてきました。正式には、「○○州、○○山、○○寺行事次第」という内題が付いていて、空欄にそれぞれの所在地・山号・寺名が書き込めるようにしてありました。例えば「武蔵野州諸嶽山總持寺行事次第」などという具合です。これは、弟子たちが『瑩山清規』を書き写して写本とし、各地に教えを広めていく際に、全国どのお寺の住職になつても、その寺院の名前を書き込んで使用できるように整えられていました。

そうしますと、全国各地にこの写本があることによつて、四月八日には花祭りを一斉に行い、二月十五日のお涅槃会では皆がお釈迦さまを偲んで法要を営むことが出来ました。それは偏に『瑩山清規』が全国に伝播していったからです。

この流れを承けて明治期に定められたものが、現在の『行持軌範』であります。私たちが普段行じている法要などの多くは、まったくこの『瑩山清規』の恩恵に浴するものであり、それを伝えてきたのが明峰派や峨山派であつたのでしよう。

最後に申し添えます。

先ほどの圭室先生のお話で寛永六年（一六二九）に起きた「転衣事件」が紹介されました。この事件により永平寺はしばらく住職を欠くという異常な状態に陥りました。

実はこの事件の解決に私の住職地の檀越が関わっているのです。

私の出身は福井県越前市で、住職地は龍泉寺と云い御開山は通幻寂霊禪師です。通幻禪師はここで亡くなられ、以後同寺は江戸中期まで「通幻十哲」派による輪住制を敷きました。

その龍泉寺が江戸時代に入り本多伊豆守富正という武将が高祿を喜捨して大檀越（中興開基）となりました。本多伊豆守は越前藩の国老でありました。国老とは聞きなれない役職ですが、越前藩では家老より上に設けられた役職でありました。越前藩は尾張・紀州・水戸の御三家に並ぶ立場でした。それは藩祖が徳川家康次男の結城秀康であったからで、二代將軍秀忠は秀康の弟になります。

家康は関ヶ原の合戦の後、加賀藩前田家を抑える要所として、秀康を越前藩六十八万石の藩主として派遣しました。その時一緒に随行したのが本多伊豆守でありました。

本多伊豆守は大変信心が篤く、越前へ入ると直ちに龍泉寺を自身の菩提所と定めて篤く帰依いたしました。そして度々お寺に参詣して坐禪を修し仏の教えを聴きました。

また、寛永十八年には永平寺に高祖道元禪師の木像を寄進しております。この木像はその後、五度の回祿でも焼失を免れ、現在に至っているのです。そして転衣事件が起きるとその解決の為に活躍をいたしました。事件の後、永平寺は約五年もの間、住職不在の状態が続きましたが、本多伊豆守は藩を通して幕府と粘り強く交渉し永平寺の後住問題を決しようとして努力しました。

その結果、寛永十一年に上州の雙林寺から秀察禪師を住職に迎えることとなり、永平寺は以前の状態に回復することが出来たのです。

ただ単に、僧侶だけが永平寺の復興に尽力したのではなくて、本多伊豆守のような篤信の人物もいたということです。

つまり、峨山派の住職が檀信徒への布教教化に於いて、總持寺の発展興隆と共に永平寺の復興をお檀家さんに説いていたのではなかったのか。

その要因が承陽殿前庭の「峨山石」であり、本多伊豆守の働きに繋がったのでしよう。

そういう意味では、峨山禪師の示された「一味同心」とか「和合同心」、あるいは瑩山禪師の示された「檀越の力を無くしては自分の仏道成就是あり得ない」ということの実践なのです。檀家さんと住職がピタッと一枚となり共に歩んで行く。

和合とは単に一緒に混ぜ合わせるのではなく、「和え物」といわれるように色々な物を調理してもお互いの味を殺すことなく活かし合って、調和のとれた美味しい食材が出来あがるということです。

他人を活かし同時に自分をも活かすことが、瑩峨御両尊の教えであります。

実はそれを顕著に表現しているのが、私たちが普段から搭ける絡子やお袈裟であります。

お袈裟は沢山の布切れが集まり継ぎ合わされて出来ています。一枚の布きれは隣の布きれを支えていると同時に隣の布きれから支えてもらっています。お互いに支え合っている状態を象徴しているのがお袈裟であり絡子でありますね。

改めてこの大遠忌を迎えるに際しまして想いを強くする点は、峨山禪師及びその弟子たちから今日まで相承されている教えは、「檀信徒を敬い人びととの繋がり大切にす」ということなのです。

自分一人だけの幸せを求めるのではなくて、周りの人びとの幸せも念じなければいけないのだよということではないかと思えます。

以上で私のお話を終わらせていただきます。
ご清聴ありがとうございました。